

Commentarii Yamatenses de Antiquitatibus

継体天皇論

淀川水系の掌握と大和の資本

Le contrôle du réseau fluvial de la Yodo et le capital de Yamato

Joan R. Piggott, The Emergence of Japanese Kingship 第三章を起点とした検討

松石 竹志

Takeshi Matsuishi, M.D., Ph.D.

MMXXVI 講演スライド・草稿・2026年7月

目次

Plan de l'exposé

序	継体の二つの相貌	六	地の利 —— 信長と尾張の比較として
一	ピゴットの空白	七	淀川水系の掌握
二	製鉄と息長氏	八	磐井の乱は継体の計算に入っていたか
三	騎馬文化の実像	九	海を渡る力
四	磐井の乱	十	大和の資本
五	継体の出自	結語	

継体の二つの相貌

Deux visages du roi Keitai (r. 507?–531?)

空洞化の相貌

- － 大伴金村らの推挙を受けて即位
- － しかし二十年にわたり大和入りを果たせず
- － 王権の実効支配の空白を思わせる

征服者の相貌

- － 近江・越前という辺境地方勢力の出
- － 最終的に大和の中枢を制圧
- － その後の王統の起点となる

ピゴット第三章は継体朝を「新興地方勢力による王権掌握」の枠組みで描くが、その叙述には資料的制約による空白が残る。本稿はこの空白を起点に、七つの論点を通覧して継体像を再構成する。

I ピゴットの空白

Ce que le chapitre III ne dit pas

- 継体個人と騎馬導入との関わりには触れていない
- 息長氏の製鉄は「採鉱と製錬によって富強を得た」「日本最古とされる」と記すが、これは注に依拠した一説の紹介であり、断定的主張ではない
- 磐井の乱についても、鉄・騎馬による軍事的優位という文脈での言及はなく、新羅同盟の破談の結果、磐井が「大王方の軍事力」に単独で敗れたという簡潔な記述にとどまる

ピゴットの叙述は、継体の権力基盤を「鉄と馬」という物質的資源に還元する解釈を、少なくとも明示的には採っていない。この空白をどう埋めるかが、以下の検討の出発点となる。

II 製鉄と息長氏（一）

Une chaîne de citations — les notes de Piggott

- 継体を息長氏中心の辺境連合の代表者とする理解は塚口義信の研究に基づく（原注4）
- 息長氏の製鉄については角林文雄（1979）、直木孝次郎（1958）、大橋信弥（1984）、和田萃（1988）が典拠として挙げられる（原注5）
- 和田は近江製鉄が5世紀初頭に遡る可能性を示唆しつつ、なお論争があると注記——ピゴットの「日本最古」はこの慎重な言い回しをそのまま反映

留保 以下はいずれもピゴットの前注からの孫引きであり、原典そのものの照合は今後の課題として残る（塚口 1976・角林 1979・直木 1958・和田 1988・大橋 1984 は本稿末尾に「孫引き・原典確認中」と付記）。

II 製鉄と息長氏（二）

L'évolution d'une même plume — Ōhashi Nobuya

1984年

早期説寄りの文脈でピゴットに引用される

2007年

『継体天皇と即位の謎』より慎重な年代観へ
修正

2020年

新装版・講演でも慎重論を維持

- － 当初「大橋信弥（慎重論）」対「山尾幸久・森浩一（積極論）」という対立図式で整理していたが、これは不正確
- － 実際には大橋信弥という同一の研究者が、1980年代から2000年代にかけて、より慎重な年代観へと自説を修正していった学説史上の経緯
- － 森浩一「稲と鉄の渡来をめぐって」（1994）も近畿の製鉄開始を六世紀とみており、大橋の後年の年代観と方向性を同じくする

III 騎馬文化の実像（一）

Chevaux et harnais — prestige plutôt que puissance militaire

23基

越前 馬具出土古墳数

13基

若狭 馬具出土古墳数

北陸道域最多

- － しかしその多くは横穴式石室を伴い、この石室形式自体が五世紀後半以降、とりわけ六～七世紀に広まる形式であるため、継体在世期間との厳密な一致には留保が必要
- － 列島への騎馬文化伝来の主流ルートは近畿（大阪・葦屋北遺跡等）とされ、日本海側が近畿に先行する独自の受容ルートであったとする学説は確認できない
- － 藤ノ木古墳の金銅製馬具も、実戦用というより儀礼用・威信財としての性格が強い——大王権が交易・外交ルートを独占し、威信財を地方首長へ分配する体制と符合

III 騎馬文化の実像（二）

La théorie de la conquête équestre — un anachronisme

- － 江上波夫の騎馬民族征服王朝説は現在ほぼ支持されていない
- － 江上が征服者として想定するのは崇神（第一次建国・3世紀末～4世紀初頭）と応神（第二次建国・5世紀初め）であり、継体（6世紀初頭）ではない
- － 継体の大和入りは応神朝の畿内征服から一世紀以上を経ており、両者は別の歴史的事象——江上説の当否は継体の権力基盤論の直接の証拠にはならない
- － 佐原真・田中琢・小林行雄・白石太一郎らの批判——古墳副葬品の変化は突発的でなく、約二百年にわたり緩やかに進行し、馬具・武具の増加は古墳時代中期以降、六世紀にかけて明確化する

日本の地形は大規模な騎兵運用に適さず、大陸・満州・ローマのような決定的な軍事的優位は生じにくかった（日露戦争における日本騎兵の立ち遅れも傍証）。

IV 磐井の乱（一）

Réexamen d'un récit — le soulèvement d'Iwai (527)

- 『日本書紀』が描く新羅同盟・援軍破談という筋書きは、『百濟本紀』由来の記述と漢文的修飾を多分に含み、新羅への言及を欠く『古事記』の簡潔な記述以上には出ない、とする見解がある
- 近年有力な解釈——磐井の乱を、大和王権と相対的に自立した筑紫勢力との、対外交渉権・交易権をめぐる対立として捉え直す
- 磐井は新羅との実質的な交易関係（軍事同盟というより経済的利害）を有していた可能性
- 岩戸山古墳の石人・石馬の分布は筑紫・肥・豊に及ぶ（「有明首長連合」説）——磐井が広域的な勢力を築いていたことの考古学的裏付け

IV 磐井の乱（二）

Représailles symboliques et infrastructure administrative

象徴的報復

- 『筑後国風土記』逸文——官軍は逃亡した磐井本人を捕らえ損ね、岩戸山古墳の石人の手・石馬の首を打ち折った
- 考古学的にも損傷として確認される
- 磐井個人の墓への象徴的破壊であり、九州文化全体への組織的弾圧ではない

統治インフラの構築

- 糟屋屯倉・鎌屯倉・穂波屯倉・豊国の五屯倉など、北部九州沿岸部への屯倉網の設置
- 冷静かつ戦略的な封じ込め策
- 象徴的報復と実務的インフラ構築が同時並行で進められた

筑紫君一族の独自の政治文化 岩戸山古墳「衙頭（がとう）」区画には裁判官（解部）・盗人（偷人）・盗品の猪という司法の場面を再現した石造群があり、磐井が独自の統治・司法観念を持つ「政権」としての自己像を有していたことを示唆する。磐井の乱は独自の政治文化を持つ一勢力と大和王権との、対外交渉権をめぐる衝突として理解すべきである。

V 継体の出自 —— 三つの解釈

Trois hypothèses sur l'origine de Keitai

① 王族説

大橋信弥（後年）は隅田八幡神社人物画像鏡銘の「意柴沙加宮」解釈から、継体は即位以前から大和忍坂に本拠を持ち、近江高島は父・彦主人王の「別業」に過ぎなかったとする。水野正好も正規の継承者説を支持。

② 大和側擁立説

大伴金村らが武烈後継者不在の危機に際し、継体の武力・経済力を見込んで擁立したとする。

③ 地方勢力進出説

樟葉→筒城→弟国と、二十年をかけ淀川水系沿いに拠点を移しながら大和を包囲・懐柔し、実力で制圧しつつ、手白香皇女との婚姻で血統上の正統性を後から調達——現在やや有力。

三説は排他的対立というより、継体政権が複数の正統性の資源——地縁・武力・血統——を重層的に動員したことの異なる側面の強調と見るべきかもしれない。「大和に地盤があること」と「直系の血の近さ」は別の資本であり、両立しうる。

VI 地の利 —— 信長と尾張の比較として

Un avantage géographique comparable à Oda Nobunaga et Owari

- 1 近江は大和・山城と北陸・東海を結ぶ結節点
- 2 琵琶湖水運という輸送インフラ
- 3 若狭湾は瀬戸内・九州ルートとは別の対大陸窓口——鉄需要拡大に伴い日本海交易の要衝に
- 4 淀川水系を通じ大和盆地を経由せず難波へ直接アクセス可能
- 5 越前（九頭竜川流域）は農業的先進地
- 6 近江・越前の在地豪族は継体以前から大和の通婚圏に組み込まれた「見知った隣人」（允恭朝の踐坂大中比弥の例など）

大伴らによる継体への「呼びかけ」も、既存の縁戚ネットワークを通じた具体的な人間関係であった可能性が高い。継体の大和入りは、すでに大和と幾重にも結ばれていた地方勢力が、その関係を政治的に結実させた事例。

VII 淀川水系の掌握

Trois palais, trois affluents



- 淀川水系を構成する異なる河川を順に押さえていく、戦略的な動きであったとの解釈がある
- 今城塚古墳（継体陵）の円筒埴輪に大型船の線画が多数見られることも、「水運の王」としての性格を裏付ける傍証
- ただし筒城から弟国への移動はむしろ大和から後退する方向であり、遷宮のすべてが計算通りの戦略であったと単純化はできない
- 実際の抵抗との押し引きの中で生じた、行きつ戻りつのプロセスであった可能性も残しておくべき

VIII 磐井の乱は継体の計算に入っていたか

Calcul politique ou concours de circonstances?

- 直接的な史料の根拠はない
- 527年の衝突は、新羅による南加羅・喙己吞奪取という直前の半島情勢の急変への対応という性格が強く、即位時（507年）からの周到な計算というより、より偶発的な事態であったと見るべき

それでも成り立つ、穏当な理解

「北部九州（筑紫）との関係整理は、大和を本拠とするいかなる政権にとっても、遅かれ早かれ避けて通れない構造的課題であった」。若狭・淀川水系の掌握だけでは対外交易は片肺飛行にとどまり、瀬戸内海の出口（博多湾）を扼する筑紫勢力との関係整理なしには、大陸との実質的な交易・外交の主導権を握ることはできなかった。

この構造的な論理は指摘しうるが、これを「列島統一の意思」といった時代錯誤な解釈へ短絡させることは避けねばならない。

IX 海を渡る力（一）

Expériences de navigation — la réalité technique

- 1989年「なみはや」実験——長原高廻り2号古墳出土の舟形埴輪をもとに全長12m・幅2m弱・8人漕ぎの準構造船を復元し、大阪一釜山間700kmの実験航海を実施
- 船体は極めて不安定であり、帆走も構造上不可能であることが判明
- 兵庫県立考古博物館「ひぼこ」による日本海航海実験
- 伊興遺跡（東京都足立区）出土の全長約8mと推定される船底材、葦屋北遺跡・讃良郡条理遺跡における「構造船」であった可能性の指摘

IX 海を渡る力（二）

Nuances — relire les expériences

- － 「なみはや」の失敗は現代クルーの技能不足による可能性——実際の古代の航路は対馬・壱岐を経由する島づたい（数十km単位）であり、700km直行という実験設定自体、実際の航海より過酷であった可能性がある
- － 国立科学博物館「3万年前の航海」プロジェクト——熟練した漕ぎ手が丸木舟のみで225km・黒潮を越えて与那国島へ到達
- － 鑑真の渡航失敗——5度のうち3度は出航前の密告・逮捕という政治的妨害によるもの。実際に海に出た2度はいずれも暴風による漂流
- － 正規の遣唐使船でも東シナ海横断の成功率は約75%とされる。『魏志倭人伝』の「持衰」の風習は、当時の倭人自身が航海を命がけの行為と見なしていたことを示す

騎馬民族説は退けられるべきである一方、列島の人々を深い時間軸で「海洋民族」と捉える理解は3万年前の渡来以来の考古学的痕跡と整合的であり、継体の淀川水系掌握・水運戦略という像とも無理なく接続する。

X 大和の資本

Le capital que Yamato seul pouvait offrir

17,906 町

大和国 『和名類聚抄』 所載 田積

8,962 町

山城国 『和名類聚抄』 所載 田積

大和は山城のほぼ2倍——継体在世期の直接統計ではないが、畿内における大和の相対的規模を示す最も具体的な数字

- － 仁徳陵をはじめとする巨大古墳の畿内集中は、当時の労働動員力（人口と農業余剰）の考古学的傍証
- － 大和盆地は降雨の少なさゆえ、稲と綿花を一年ごとに交代させ裏作に麦・菜種を作る輪作体系を発達——江戸期には綿花・菜種の一大産地に
- － 灌漑施設と金肥（干鰯・油かす）を多用する集約農業の伝統
- － 田積の比較・巨大古墳の労働動員力・集約農業先進地としての歴史的評判・倭の五王の称号に見る国際的外交承認——いずれも「大和という土地固有の、他では代替不可能な経済的・政治的資本」を示唆

結語

近江・若狭・淀川水系という、水運と縁戚関係に基づく地の利を固めることは、大和という資本を手中に収めるための前提条件ではあったが、それ自体は目的ではなかった。

二十年という歳月をかけてでも成し遂げる価値のある事業とは、他のいかなる地方勢力も代替しえない、蓄積された経済力・労働動員力・国際的正統性——大和の資本そのものを手中に収めることであった。

製鉄・騎馬という単一の物質的資源に還元する説明も、血統・武力いずれかに還元する説明も、この結論の前では副次的な位置に退く。継体の大和入りは、地方の実力者が複数の資本——地縁・水運・縁戚、そして最終的には大和そのものが体現する経済的・政治的蓄積——を段階的に統合していった過程として理解するのが、現時点で最も無理のない読み方であろう。

なお本稿で確認した論点の多くは、なお学説の対立や史料的制約を残しており（近江製鉄の年代比定、磐井の乱の史実性、鏡銘の年代比定など）、今後の考古学的知見の更新に応じて修正されるべき暫定的な見取り図であることを付言しておく。

参考文献

Sources primaires et études

一次史料

- 『日本書紀』 継体紀・磐井の乱関連条
- 『古事記』 継体天皇条
- 『筑後国風土記』 逸文（岩戸山古墳・石人石馬条）
- 『三国志』 魏書東夷伝倭人条（魏志倭人伝）
- 源順（編）『和名類聚抄』（931～938年頃）
- 隅田八幡神社人物画像鏡銘（癸未年銘）

研究文献（抜粋）

- Joan R. Piggott, *The Emergence of Japanese Kingship* (Stanford UP, 1997) 第三章
- 大橋信弥『継体天皇と即位の謎』吉川弘文館、2007（新装版 2020）
- 江上波夫『騎馬民族国家』中公新書、1967（改版1991）
- 佐原真『騎馬民族は来なかった』NHKブックス、1993
- 森浩一「稲と鉄の渡来をめぐって」1994
- 水野正好「継体天皇とその時代」（高槻市教育委員会編、2008）
- 塚口義信 1976／角林文雄 1979／直木孝次郎 1958／和田萃 1988／大橋信弥 1984 —— ピグott原注からの孫引き・原典確認中

繼体天皇論

Commentarii Yamatenses de Antiquitatibus

松石 竹志 Takeshi Matsuishi, M.D., Ph.D. · 横浜基礎研究所